

ヨラム・ハゾニー著、庭田よう子訳、中野剛志・施 光恒解説 『ナショナリズムの美德』

藤原, 拓広
九州大学大学院地球社会統合科学府 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/4774187>

出版情報 : 政治研究. 69, pp.79-86, 2022-03-31. Institute for Political Science, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :

書評

ヨラム・ハズニー著、庭田よう子訳、中野剛志・施光恒解説『ナシヨナリズムの美德』

(東洋経済新報社、二〇二一年)

Yoram Hazony, *The Virtue of Nationalism*, Basic Books, New York, 2018.

藤原拓広

一 はじめに

本書の著者ヨラム・ハズニーは、イスラエルの政治哲学者、聖書研究者であると同時に、シオニスト(ユダヤ民族主義者)でもある。そのような背景をもつ著者にとって、ナシヨナリズムは近年の多くのアメリカ人やイギリス人が考えているような政治的病ではないという。彼にとつて、ナシヨナリズムは「国家を育んだ、誰にとつても関わりの深い政治理論」(一七頁。以下、本書からの引用は頁数のみを記す)なのである。本書は、そうしたシオニストでもある著者が、聖書研究を用いながら、ほとんどの政治哲学者が忌み嫌う存在であるナ

シヨナリズムや国民国家の擁護を試みた意欲的な研究である。

ところで、本書の著者であるハズニーは、二〇一八年に、当時のアメリカ大統領ドナルド・トランプの「私はナシヨナリストである」発言を擁護したことで知られる。このトランプの発言は、リベラルなマスメディアから多くの批判を受けたが、ハズニーは、そうした批判に反論し、トランプおよびナシヨナリズムを擁護したのである。アメリカにおけるナシヨナリズムをめぐる論争の中心人物である著者が自身の主張を展開した本書は、大きな話題を呼び、とりわけアメリカの保守派に大きな影響を与えている¹⁾。本書の解説者の中野剛志が述べているように、「アメリカの政治思想の変化に、本書が連動しているのであるならば、それだけでも、我々日本人が本書を読むべき理由としては十分」(四頁)だろう。以下では、本書の書評を書いていく。

二 本書の概要

まず、本書の内容を概観する。

第一部「ナシヨナリズムと西洋の自由」では、西洋の政治においては、世界秩序の二つのビジョンが何世紀にもわたっ

て常に対立してきたことが説明されている。ここでいう西洋の政治における二つの世界秩序のビジョンとは、一つは自由で独立した「国民国家」からなる秩序であり、もう一つは人類をただ一つの「帝国」主義国家の下で統一する秩序である。

ヘブライ語聖書（旧約聖書）を起源とする国民国家の秩序と、ローマカトリック教会の政治思想でもある帝国の秩序は、有史以来争いを繰り返してきたが、一六四八年に二応の決着を見ることとなった。ウエストフアリア条約が結ばれ三十年戦争が終結したことで、普遍的なカトリック帝国というビジョンが敗北したのである。

ウエストフアリア体制におけるヨーロッパの政治生活は、著者が「プロテスタント構造」と呼ぶ秩序の下で再建された。ヘブライ語聖書を起源とするプロテスタント構造は、二つの原則から構成されていた。その原則とは、第一に「合法的政府に必要な最低限の道徳規範」（すべての政府は最低限の道徳としてモーセの十戒を維持しなければならないということ）であり、第二に「ネイションの自決権」であった。著者によると、ウエストフアリア体制の政治秩序は、これら二つの原則の緊張関係からなる秩序であったという。

プロテスタント構造は第二次世界大戦の頃までは西洋の政治の基盤でありつづけたが、その大戦が終結した後、著者が

言うところの「リベラル構造」という政治秩序に取って代わられるようになった。実際には帝国主義国家であるはずのナチス・ドイツがナショナリズムの提唱者と考えられるようになったことで、プロテスタント構造は力を失ったのである。

ここで新たに台頭したリベラル構造は、主にジョン・ロツクの『統治二論』に基づく秩序である。この構造では、集団は自由な個人の同意によつて構築されるものと考えられている。著者によれば、このリベラルな考えでは、ネイションの境界を説明できない。また、近年リベラリズムが聖書の伝統と切り離れたことで、国民国家は必要ないとさえ考えられるようになってきているという。著者が危惧するのは、多くの政界エリートや知的エリートが、この帝国主義的なりべラリズムのパラダイムにとりつかれていることである。著者によると、彼らは、E.U.離脱を決定したイギリス人を中傷するなど、異なる意見に対して不寛容である。

このリベラル構造に対して、著者は反対の立場をとっている。リベラル構造への反対派は、ネオ・カトリック、ネオ・ナショナリスト（国家統制主義者）、保守主義的（伝統主義的）立場の三つに分かれるが、著者がとるのは保守主義的立場である。彼によると、この立場は、プロテスタント構造の二つの原則に基づき、リベラル構造を批判する立場である。

第二部「国民国家とは何か」では、政治秩序の最善の形態とは、独立した国民国家からなる秩序だと論じられている。

ここで著者はまず、政治哲学を、「政府の哲学」と「政治秩序の哲学」の二つに分ける。一方の政府の哲学とは、国家を前提として、政府の最善の形態を探究するものであり、もう一方の政治秩序の哲学とは、「政治秩序の原因を理解し、その理解に基づいて、わたしたちが利用できる政治秩序のさまざまな形態を見つけ出し、そのなかでどれが最適か判断しようとするもの」（七九頁）である。著者によれば、どちらの政治哲学も有用なものではあるが、政府の哲学は、結束し独立した国家を自明のものとみなしてしまうため、それを維持するための努力に注意を払わない点に問題がある。つまり、政府の哲学が有用であるためには、結束し独立した国家はいかなる政治秩序の上で可能となるのかという、より根本的な探究、すなわち政治秩序の哲学が必要となるのである。

では、最善の政治秩序の形態とはどのようなものか。著者はまず、強力な組織はいかにして生じるのかを考察する。その考察によれば、強力な組織とは、個人がその組織の利益や目的を自分のものとみなすことによって生まれる組織である。これはすなわち、個人が自己を拡張し、自己の範囲内にその組織をも含めてしまう組織である。著者は、こうした組

織を、「相互の忠誠」によって構築された組織と呼ぶ。

著者によると、ネイションも、そのような自己の拡張によって生じた組織である。まず、個人は相互の忠誠の絆によって家族を構築する。次に、さまざまな家族が結びついて、氏族が生まれ、その氏族が団結して、部族が形成される。最後に、部族同士が結びついて、ネイションを形成するのである。

国家の誕生については、著者は、二つの場合があると考えている。その一つは、ネイション内の部族の連合が自由国家を樹立する場合であり、もう一つは、専制国家が外国人を征服する場合である。ここで着目したいのは、著者が国家の誕生に関するいわゆる社会契約論的な説明を退けていることである。彼によれば、自由な個人が同意によって政府を樹立するというのは、おとぎ話であり、虚構なのである。

著者は、このようにして誕生した「国民国家」こそが、政治秩序の最善の形態だと論じている。彼は、国民国家の利点を、「無政府状態」と「帝国」という両極の政治秩序と対比しながら、説明している。

まず、無政府状態とは、氏族・部族の秩序である。この政治秩序では、中央集権的な国家は存在しない。そのため、氏族や部族間での戦争の危険が常にあるとされている。対して、帝国とは、人類を包摂する集団による秩序である。「帝国

秩序においては、すべての政治生活は、見ず知らずの人類の統一という道徳的原理に根ざして」(二一八—一九頁)いるという。しかしながら、この秩序では、人類の統一のための征服とそれに伴う荒廃が横行するとされている。

これらの政治秩序の中間にあるのが、著者が擁護する国民国家の秩序である。著者は、この第三の秩序は、無政府状態や帝国と比較して、多くの利点を有していると論じる。彼によると、国民国家の秩序では、ネイションの内的統合への欲求が氏族や部族間の戦争を抑制し、対外征服という発想への軽蔑や力の均衡といった教義が征服を抑制するため、ほかの二つの形態の難点を克服することができるのである。

また、国民国家の秩序は、競争的な政治秩序や個人の自由などといった利点ももっている。まず、競争的な政治秩序に關してである。これはすなわち、人間の理性に絶対の信頼を寄せる合理主義的認識論と關連することの多い帝國的政治と異なり、ナシヨナリズムの政治は人間の理性に対して懐疑心を抱く経験主義的認識論の立場をとることが多いということである。経験主義的な立場をとるナシヨナリスト的秩序は、各ネイションがそれぞれ独自の方法で政治制度などについての試行錯誤を行うことを期待する。そのように各ネイションが競争しながらも真似しあうことで、各ネイションは自国を

向上させることができるのである。

次に、個人の自由についてである。著者は、帝国主義国家よりも国民国家の方が、個人の自由を保護するのに適していると考えている。国民国家では、言語や宗教の共有、および戦争における団結といった事実によって相互の忠誠心が、個人の自由の基盤となっているのである。

こうした国民国家の利点を鑑み、著者は、次のように述べている。すなわち、「わたしたちの先祖が築き、貴重な遺産としてわたしたちに残した独立した国民国家を維持し、強化するという困難な作業に従事しなくてはならない」(二一九頁)。第三部「反ナシヨナリズムと憎悪」では、ナシヨナリストの憎悪への非難に対して、帝国主義者の憎悪を検討している。著者は、ナシヨナリズムが、競合する氏族や部族間の憎悪やほかのネイションへの憎悪を生み出すことを認めるが、帝国主義者も、その理想を拒むネイションに対する憎悪を抱くではないかと論じる。また、現代のリベラルも、こうした帝国主義の憎悪から解放されていないではないかと批判する。

著者は、このようにリベラル派も帝国主義的な憎悪を抱いているにもかかわらず、彼らの憎悪はあまり論じられてこなかったことを問題視している。著者は、以下のように述べている。「現代のリベラルな言説には盲点がある。普遍的な政

治秩序を信奉するため、リベラル帝国主義者たちは、憎しみの原因をネイションや部族の個別主義（あるいは宗教）に帰する傾向があるが、その一方で、普遍的な政治秩序の達成という願望を実現させようとするあまり生じる憎しみを見落としたり、軽視したりしている」（二五九頁）。

終章「ナシヨナリズムの美德」では、ナシヨナリズムは美德であると述べられている。

ナシヨナリズムの美德とはどのようなもので、またそれはなぜ生じるのか。著者は、ナシヨナリストが、普遍主義者の革命家と部族の忠誠主義者との中間の存在であることに着目している。これはすなわち、ナシヨナリストは、部族の忠誠主義者と同じ個別主義者であるため、国民国家への忠誠心を抱いており、また普遍主義者の革命家のように、世界秩序全体、ナシヨナリストの場合は国民国家からなる秩序全体へも献身しているということである。

著者によれば、その結果、ナシヨナリストの精神には、第一に「自分のネイションや部族の古来の伝統への強い忠誠心」（二七二頁）が、第二に「自分のネイション内の諸部族の伝統の多様性、およびほかのネイションの伝統の多様性の自覚から生じる懷疑主義や経験主義」（同上）が存在し、それらの間には緊張関係があるという。この緊張関係から生まれる成果

こそが、ナシヨナリズムの美德である。

著者は、「自由に生きることができ、自分たちの針路を決定し、可能な場合にはほかのネイションに利益をもたらし、ただし、ほかのネイションに自分たちの支配と法律を力ずくで押しつけることを望まないときに、真の道徳的成熟に到達する」（二七四頁）と論じる。彼によると、成熟のためにも、わたしたちはネイションの自由と独立を守らなければならないのである。

三 本書の意義

本書は、大変意義深い研究である。本稿第一節で言及した意義以外にも、さまざまな意義を有している。ここでは、さしあたり三点を提示しておきたい。

一つ目の意義は、「帝国」と「国民国家」という区分に基づき議論が行われている点である。アメリカ政治思想史研究者の井上弘貴や公共政策学者の杉谷和哉が指摘しているように、本書の特徴は、帝国と国民国家、帝国とナシヨナリズムとの対比に基づきながら、議論が展開されている点にある²⁾。このフレームワーク自体、非常に興味深いものがあるが、この区分がとりわけ重要なのは、本書の解説者の施光恒が述

べているように、著者がグローバリズムを帝国とみなしているからであろう。本書の議論を基盤として、グローバル化以後の世界秩序について考えることが可能となるのではないかというわけである（二八四―二八五頁）。

二つ目の意義は、既存の政治理論への痛烈な批判が行われている点である。前節で見てきたように、本書で著者は、現代の政治哲学者の趨勢を占めているリベラルや社会契約論者を批判している。

著者の批判とは端的に言えば、従来の政治理論の前提が現実的ではないだろうという批判である。今後は、本書を参考にしながら、ネイションのような集団、さらに言えばその文化や伝統に帰属せざるをえない人間を前提に、社会や国家について考えていく必要があるであろう。³⁾

三つ目の意義は、いわゆる「リベラル・ナシヨナリズム」論の発展に貢献している点である。

本書とリベラル・ナシヨナリズム論とは異なる点もあるが、著者はたとえばデイヴィッド・ミラーの議論を何度が参照しており、近い点も多い。たとえば、国民国家こそが個人の自由を保護するのに適した政治的単位だと考えている点は、両者の類似点であるが、リベラル・ナシヨナリストがリベラリズムの価値を重視している一方で、著者がそれを批判してい

るのは、大きな相違点であるように見える。

ただ、解説者の中野が論じているように、著者はリベラリズムそのものを批判しているわけではなく、「政治秩序の哲学」としてのリベラリズムを批判しているということは注目し値する（八一―九頁）。中野によれば、たとえば保守主義はリベラリズムと対立的だと考えられているが、それらはカテゴリーが異なる（リベラリズムが政府の哲学であるのに対して、保守主義は政治秩序の哲学）のである。中野は、以下のように述べる。「政治秩序とは、本質的に、非リベラルなのである。しかし、すべてのリベラルな統治形態は、非リベラルな政治秩序を基礎としている。そして、そのリベラルな統治形態を成立させる非リベラルな政治秩序こそ、ハズニーが擁護する『国民国家』にはかならない」（七一―八頁）。リベラル・ナシヨナリストは、リベラルな価値はナシヨナルなものが必要であれば成り立たないと考えているが、こうした考え方は、本書の政府の哲学と政治秩序の哲学という区別を参照した方がより説得力をもつて説明できるように思われる。

また、著者は国民国家の秩序の利点として、競争的な政治秩序である点をあげているが、この議論もリベラル・ナシヨナリズム論の発展にとつて有用ではないだろうか。リベラル・ナシヨナリズム論の問題点の一つは、ネイション間の関

係があまり考慮されていない点であるが、競争しながらも真似しあう国民国家という説明は、その関係についての最も説得力のある説明の一つだと思われるのである。

四 本書の難点

以上のように、本書はさまざまな意義を有する研究であるが、難点がないわけではない。ここでは、二点を示したい。

一つ目の難点は、本書におけるリベラリズム理解は一面の節でも確認したが、もう少し詳しく見ていきたい。

著者は、リベラリズムを、普遍主義的で帝国主義的な思想とみなしているが、それはリベラリズムの一面面にすぎない。たとえば政治哲学者のジョン・グレイは、リベラリズムを、「普遍的レジームをめざす自由主義」と「平和的共存の自由主義」とに区別している。⁽⁵⁾ グレイによれば、ハズニーがリベラリズムを規定する際に主に引用しているロックは、あくまでも前者のリベラリズムの提唱者だという。この区別の妥当性はここでは検討しないが、著者がリベラリズムの一面面を過度に強調しており、そのほかのリベラリズムの側面にもより焦点を当ててもよかったことは間違いないであろう。

二つ目の難点は、従来のナシヨナリズム論を批判する必要があったというものである。著者は、自己の拡張によってネイションが生じたと考えているが、これは現在のナシヨナリズム論では傍流の見解である。近年のナシヨナリズム論では、ベネディクト・アンダーソンらによる近代主義的な説明が、ネイションの起源に関する主流の説明となっている。著者は本書のなかで、この近代主義者の議論の一つの注でしか言及しておらず、あまり関心をもっていないのだろうか、もう少し取り上げて検討してもよかったようにも思われる。⁽⁶⁾

ただ、強調しておきたいのは、著者はネイションの起源の説明に際して、軍事史家のアザー・ガットの歴史学的な議論を援用するなどしており、⁽⁷⁾ 本書のナシヨナリズム論は十分に学術的なものだということである。ここで言いたかったのは、本書の議論の説得力を上げるためにも、著者は近代主義者の説明を丁寧に批判してもよかったのではないかとこのとだけである。

五 寛容な対話をめざして——むすびにかえて——

以上のような難点があるにもかかわらず、本書は大変優れた研究である。ここでは、最後にもう一つ本書の重要な主張

を取り上げて本稿の締めくくりとしたい。

著者はリベラリズムの不寛容さについて述べる際、リベラリズムの教義にうまく抗することができるとみなされた個人や集団、意見などに対する誹謗中傷活動に言及している。著者によると、こうした活動は、かつては大学の言説のみに向けられていたが、最近はそのほかの公共の場にも向けられている。こうした状況を、彼は「西洋の民主主義国家は急速に1つの大きな大学キャンパスになりつつある」(二六六頁)と表現している。

当然ながら、このような不寛容な現状は健全なものではないだろう。リベラルもナシヨナリストも、ある程度の憎悪を抱いてしまうのは仕方ないだろうが、お互いが異なる意見にも耳を傾ける姿勢をもつことが必要であろう。そうした対話をめざす上で、現在の社会の不寛容さを描いた本書は、重要な意義をもつと思われる。本書の読者によって、たとえばナシヨナリズムをめぐる活発な議論が行われることを期待したい。

注

(一) トランプ発言とそれをめぐる論争、およびアメリカの保守派における本書の影響については、たとえば会田弘

継「トランプ政権を取り囲む思想潮流を考える——反・レーガン主義とポスト・リベラルの興隆」(久保文明編)「トランプ政権の対外政策と日米関係」日本国際問題研究所、二〇二〇年、二二—一三頁)・井上弘貴「アメリカ保守主義の思想史」(青土社、二〇二〇年)、二五一—二六〇頁を参照のこと。

(2) 参照、同右、二五四頁・杉谷和哉「ナシヨナリズムの美德とリベラリズムの失敗」『ひらく』、第五号、二〇二一年、二八八頁。

(3) 参照、岩田温・施光恒(対談)「ナシヨナリズムの美德」『WILL』、第二〇三号、二〇二一年、二九六—三〇七頁。

(4) See e.g. Young, I. M., "Self-Determination and Global Democracy: A Critique of Liberal Nationalism," in Shapiro, I. and Macedo, S. (eds), *Designing Democratic Institutions* (New York: New York University Press, 2001), pp. 161-162.

(5) 参照、グレイ、ジョン(松野弘監訳)『自由主義の二つの顔——価値多元主義と共生の政治哲学——』(ミネルヴァ書房、二〇〇六年)、二頁。

(6) See Luban, D., "The Man Behind National Conservatism," *The New Republic*, July 26, 2019.

(7) ガットの本「*ナシヨナリズムの根: 長い歴史と深い根の政治的エスニシティとナショナリズム*」(Cambridge: Cambridge University Press, 2013)を参照(27頁)。